

日本における天文と文化

はじめに

遠い昔から、天体は人々の道標となっていた。古代中国においては、天は地上世界の写しだと考えられ、地上を支配する皇帝は天を読み解く力が必要とされた。皇帝は、天を読み解くことで、人々の抱く天への畏敬を自らの身に受け、地上を支配する力として用いていた。支配者と天との強い結びつきは、支配者が天文を読み解けなくなつた後も続く。日本においては陰陽師が政治に欠かせない存在として登場する。陰陽師たちによつて読み解かれる天文は、為政者たちが政を行う上で重要な役割を果たしていた。

天文を読み解く際に、重視されていた日月や星々がどのように観察され、用いられてきたのか。記事と検証を基に、人々と天文の関係について考えていく。

谷 友 子

一 日食・月食

まず日本最古の日食記録は『日本書紀』卷二十二に「推古天皇三十六年三月戊申（二日）にみる事ができる。」

三十六年の春二月の戊寅の朔にして甲辰に天皇、臥病したまふ。三月の丁未の朔にして戊申に、日、蝕えつきたること有り。壬子に、天皇、病甚だしくて、諱むべからず。則ち田村皇子を召して謂りて曰はく、「天位に昇りて鴻基を経綸め、万機を馭らして黎元を亭育することは、本より輒く言ふものに非ず。恒に重みする所なり。故、汝慎みて祭にせよ。輒く言つべからず」とのたまふ。即日、山背大兄を召して教へて曰はく、「汝は肝稚し。若し心に望むと雖も、諛言すること勿れ。必ず群言を待ちて従ふべし」とのたまふ。癸丑に、天皇崩

りましぬ。時に年七十五なり。即ち南庭（おほはもがりつ）に殯す。

前後の記事を見てみると、この日食がただ事ではない様子が見える。この四日前の二月二十七日（四月六日）の条には、「天皇臥病したまふ」とあり、この後に三月二日の日食が続き、そして三月六日（四月十四日）には、「天皇痛み甚だしく、緯むべからず」という危篤状態になった。天皇は田村の皇子（後の舒明天皇）と山背の大兄（聖徳太子の王子）とを病床近くに召して、親しく遺言を述べ、翌七日（四月十五日）に崩御した。時に御年七五と記されている。

推古天皇の死は、臥病してわずか十日の後の急死である。日食と為政者との死は、古代の物語作者の捏造によって、しばしば組み合わされるが、この日食は実在の日食であったという。斎藤国治（3）氏の検証によると皆既日食ではなかったものの、食部分が最大九十三パーセントほどであったという。これほどの日食が起きたことと、推古天皇の崩御とは偶然の一致にすぎないが、古代の人たちが何らかの力を感じたとしても不思議はないだろう。

このほかにも、『日本書紀』には日食の記事が見ることが出来る。天武天皇九年十一月一日の日食記事までは、日付の誤差や編入間違いらしきものが見受けられるが、実際に起きていたかどうか計算を元に検証し、おそらく事実に基づくものであると斎藤（4）氏は述べて

いる。しかし、その後の『日本書紀』『続日本紀』にある日食記事は実に奇怪で、ほとんどが不食記事である。（表1）（5）

表1は日食予報記事録である。記事になっている日付と、当時の都である飛鳥京で見られたか否か、実際にどこでどのように日食が観測できたかが記されている。

この表からわかるように、実際に飛鳥京で見ることのできない日食が多く記事になっている。これらの記事は、いつたいどのような目的で記事にされたのであろうか。表1には六ヶ月おきの朔の日に日食の予報をしている箇所を見ることが出来る。確かにそのような予報をすれば、地球上のどこかではおきている確立が高いが、そのことにいつたいなんの意味があったのだろうか。編纂者はなぜ飛鳥京では確認できなかった日食を、記事として乗せたのか。『扶桑略記』の中の不食記事について、斎藤（6）氏が興味深い説明をしているので載せておく。

寛平九年九月一日癸酉（八九七年九月三〇日）、太政官より日蝕あるべしと奏す。而して日蝕せず。律師聖宝御修法をなしおえて帰山、袞一条を召し給ふ。

（扶桑略記 卷二十三）

日食が予報されたが、律師聖宝の修法読経のおかげで食とならずにすんだので、ご褒美として衣服一着を給わったという話

表 1 日食予報記事録

記事の年月日	飛鳥京での食分	食の経路と食の種類
天武十年 十月一日 (六八一年十一月一六日)	○・二	フィリピンを通る金環食
持統五年 十月一日 (六九一年一〇月二七日)	×	南極地方で金環食
" 七年 三月一日 (六九三年四月一日)	×	アフリカ南部で金環食
" 七年 九月一日 (六九三年一〇月五日)	○・二	飛鳥で欠けたまま日没
" 八年 三月一日 (六九四年三月三一日)	×	南極地方で軽い分食
" 八年 九月一日 (六九四年九月二五日)	×	北極地方で軽い分食
" 十年 七月一日 (六九六年八月四日)	×	中南米を通る金環食
文武二年 七月一日 (六九八年八月二日)	××	地球上どこにも食なし
" 二年十一月一日 (六九八年二月八日)	×	地中海へんで金環食
" 三年十一月一日 (六九九年一月二七日)	×	アフリカで金環食
大宝元年 四月一日 (七〇一年五月三日)	×	北極地方で軽い分食
" 二年 九月一日 (七〇二年九月二六日)	○・九	九州を通る皆既食
慶雲元年 二月一日 (七〇四年三月一〇日)	×	大西洋で金環皆既食
" 三年 六月一日 (七〇六年七月一五日)	×	グリーンランドで金環食
" 三年十二月一日 (七〇七年一月九日)	×	南東太平洋で金環食
" 四年 六月一日 (七〇七年七月四日)	×	フィリピンを通る皆既食
" 四年十二月一日 (七〇七年十二月二九日)	○・七	本州南東海上で金環食
和銅元年十一月一日 (七〇八年十二月一七日)	×	北極地方で軽い分食
" 二年 四月一日 (七〇九年五月一四日)	×	北極地方で軽い分食
" 二年 十月一日 (七〇九年十一月六日)	×	南極地方で皆既食

である。日食は凶兆であり、できるなら仏道修法によって避けたい思想があったのであろう。——中略——この日食は『食法典』によれば日食番号五〇〇九番の部分食で、食影はわずかに南極地方の一部をかすめたためのものであった。日本では、京都平均時で正午をやや過ぎたころに月は太陽の南方を通過した。しかし、両天体のあいだには、一、二度（太陽直径の二倍以上）もの隔たりがあり、修法によらずとも不食であった。つまり暦の誤算である。予報をたくさん発表しておいて、祈禱をして食を追い払うというのはうまく考えたものである。

齋藤氏が指摘するように、「祈禱をして追い払った」という言い訳で通用するのであれば、予報せずに日食が起こってしまうより、予報をたくさんしておいてそれに備えておけばいいという考えは納得できる。まさに陰陽師たちの巧妙な知恵であったといえるだろう。

ほかにも日食の例を見てみよう。有史至上最初の皆既日食として、京都平安京が闇に包まれたという記録が『日本紀略』後編六の天延三年七月一日の条に載っている。

七月一日辛未。日有蝕。十五分之十一。或云。皆既。卯辰刻皆既。如黑色無光。群鳥飛乱。集成尽見。詔書大赦天下。大辟以下常赦所不免者咸赦除。依日食之变也。^①

太陽は墨色となり、群鳥は飛乱し、たくさん星が見えたという描写は実に色彩豊かで、その時の様子が伝わってくる。皆既日食に驚いた政府は天下に大赦を發布し、普通の恩赦では恩恵が及ばなかった死罪のものまで減刑が行われたとある。さらに、暦も七月十三日には改元して貞元元年となった。この日食の記事は『扶桑略記』『百鍊抄』『和漢合符』などにも皆既日食の描写が載っていることから、京の人々がとても驚いた様子がうかがえる。

このように、日食は重大な天文異変として国や社会を騒がせていたことがわかった。

日食に関する記事には人々が恐れ戦き、時には社会をも動かすほどの一大事であったという様子を見ることができるが、月食^②にまつわるそのような記事を見ることが出来ない。なぜなのか。月は古代中世と多くの歌に詠まれ、人々に近しい存在であったはずだ。その月に起きる異変に誰も気づかなかったというが、そんなはずはない。なぜなら、月食記事は多数存在するからだ。(表2)^③

その理由としてまず考えられるのは、月食は日食よりも起きる回数^④が少なく、天候が曇りや雨であると観測ができないということである。しかし、日食は地球全体では六カ月おきているが、地域を限定するとその数は極めて少なくなるのだ。観測地点を考慮しなくてよい月食は、日本で確認できる回数は日食より多くなるはずである。

表2 日食・月食記録数

期 間	日食	月食	備 考
861 以前	130	9	宣明曆
862 - 1000	138	38	
1001 - 1050	21	28	
1051 - 1100	19	28	
1101 - 1150	27	46	
1151 - 1200	22	48	
1201 - 1250	27	57	
1251 - 1300	26	53	
1301 - 1350	25	49	
1351 - 1400	23	48	
1401 - 1450	31	50	
1451 - 1500	28	49	
1501 - 1550	28	49	
1551 - 1600	38	41	
1601 - 1684	56	105	
1685 - 1754	27	76	貞享曆
1755 - 1797	18	44	宝曆曆
1798 - 1843	20	46	寛政曆
1844 - 1872	13	28	天保曆

一〇〇〇年以前は圧倒的に月食の記録に比べ、日食の記録が多いが、天文知識や観測技術が発達してくる一〇〇一年から一一〇〇年の間は日食とほぼ同数、それ以降は月食記録が、日食記録の二倍程あることが表2から分かる。

どちらも同じ食という天象であり、これだけ記録があるのに、なぜ月食は日食のような記事を見ることができないのだろうか。その理由を渡邊敏夫氏は中国の『清史稿』や『李朝実録』の記録から、

「日食は災であるが、月食は災とは考えられないため記録にとどめなかつたらしい」と言っている。この説明に対して検討してみたい。次の記事は『続史愚抄』弘安九年十月十五日のものである。

十五日戊申。月食。今夜卯剋。所謂月蝕者。雖卯辰剋。為前夜分也。被定蝕御説経僧名於陣。一中路一又有宿曜陰陽道爾御祈奉行藏人兵部權大輔頭世。^①

月食が起きたことで、説経や祈祷が行われている。このことは渡辺氏の「月食は災とは考えられなかったのではないか」という説には反しているといえるだろう。

『吾妻鏡』元久元年九月十五日条には、次のような記事が載っている。

十五日甲戌。霽。將軍家去夜白地入御相州御亭。即欲有還御所。亭主奉抑留給。今夜依為月蝕。不意亦御逗留。亭主殊入興給。^②

ここでは、事前に月食が起きることが分かっており、そのため色々準備をしている様子がうかがえる。しかしこの二つの記事からも、日食のように慌てふためいている様子を見ることはできない。

この二つの食には一体どのような違いがあるのか。この二つの天象の予報について中山茂氏は次のように述べる。

日月食予報は一つの暦法のゴールであり、最後のチェック・ポイントである。食は朔（日食）と望（月食）で起こる。その時

また日月が好転の付近になれば起こらない。そこでまず交点と朔望の間隔が食の予報の際の指標となる。——中略——月食は地上の場所いかんによらず、ほとんど同時に見られる。だから観測地点を考慮しなくてよいので、予報はかなり正確に出来る。ところが、日食の場合は、月の地心視差（太陽は遠いから、その視差はほとんど無視できる）を考慮しなければならぬから、事がむずかしくなる。

日食と月食という二つの食という天象の記事に描かれる様子の違いの理由は、中山氏が指摘する、二つの天象の予報の難しさだと私は考える。

大量の日食予報記事は、予報の難しさを表していると考えられる。不食記事が大量に存在するのもそのためであろう。月食は正確性のある予報が出されるため、事前に対処が出来、人々の恐れの対象から外れていったとすれば、社会に大きな影響を与えていないことも理解がいくのではないだろうか。

時代がすすむにつれ、食予報はより正確になされるようになり、この二つの天象はしだいに天文異変とはされなくなる。現代では一大天文ショーとして多くの人の注目を集める存在へと変化していった。

二 惑星

つぎに惑星について見ていきたい。惑星の中でも火星・金星・木星・土星・水星の五惑星は五曜といい、日月を加えて七曜とも呼ばれ注目された存在であった。星は恒星と違い、見かけ上で不規則な動きをする。ゆえに予測が難しく、五惑星にまつわる天文異変記事は非常に多い。惑星にはそれぞれに固有の性質や機能が与えられ、意味付けをして占われていた。中国の『史記』『天官書』の東宮蒼龍には次のような記述がある。

火が角（宿を）「犯」し、それを「守」と天下に戦いがある。それが房（宿）と心（宿）の場合は、災いが人君に及ぶので王者はこれを嫌う。

火星が天門に接近し、そこを去らなければ天下に戦火が起る。¹⁴⁾

火星は熒惑星^{けいごくせい}とよばれ、禍災を予言するとされていた。熒惑星の行くところには、兵乱・疫喪・飢旱・災火が起ると言われた。動きの激しい星であり、人を惑わす凶星であると信じられていたよう¹⁵⁾で、平安時代には熒惑星祭という祭りも行われており、人々から関心が高かった惑星である。木星は歳星と呼ばれ、常に明らかに輝いている時は、五穀豊穡し、国家安寧、民間には福慶がもたらされる

という。『吾妻鏡』寛元二年（一二四四年）六月三日には鎌倉幕府で太白星祭の際に、歳星も一緒に祭り歳星祭を行つてゐる。⁽¹⁶⁾ 木星は十二年で全天を一周するという特徴があり、その十二の数は、後に十二支へと用いられるようになる。土星は鎮星・填星と呼ばれた。その光は暗く、五惑星の中で最も動きが緩慢な惑星であつたため、土星にまつわる記事は少ない。水星は辰星と呼ばれ、二月、五月、八月、十一月に出る時は、天下太平、五穀豊穡であるという。『吾妻鏡』貞応三年（一二三四年）五月十八日に、鎌倉幕府が水曜祭を行つてゐるといふ記事がある。⁽¹⁷⁾ 五惑星の中で最も知名度が高く注目されてゐた惑星は金星である。輝きの強いこの星は古くから注目され、多くの天文記事にその名前を見ることができ、太白星・明けの明星・宵の明星と呼ばれた。他にも夕つづ・明星^{あかほし}など多くの呼び名や地方での方言による呼び名は実に多様に存在する。⁽¹⁸⁾ 昼間、太陽の出ている時に金星を見ることが出来る「太白昼見」といふ天文現象は、凶兆とされ人々から殊に注目を集めていたようだ。

惑星それぞれの特徴と動き、「合」⁽¹⁹⁾「犯」⁽²⁰⁾の天文現象が占いの対象であつた。斉藤氏の調査によれば、一六〇〇年までの文献に三五〇例ほど見ることが出来るようだ。中世以降には公家の日記（『玉葉』『明月記』『愚管記』など）に多く見受けられる。実際に記事を見

藤原定家の『明月記』天福元年六月二日（ユリウス暦一二三三年七月十日）から四日（七月一二日）には次のような「二星合」の記事がある。

（天福元年六月）二日、乙亥、朝天晴——中略——臨昏黒、下人等称二星取合由、望見西天、今日無纖月、太白之傍東南方歟、一寸許有小星、人云、取合之後離去星也云々……

三日、丙子、朝天遠晴、伝聞、二星事、太白歳星相去三寸迫犯了、占文之趣、白衣之会曾兵飢之由云々——中略——纖月初見。二星頗有。

四日、丁丑、——中略——夜猶難堪、臥板及曙、日未入之間下人等又称星取合由、可弃之世也、後聞、此星自白昼見云々、又太白經天歟。⁽²¹⁾

この記事に対する検証を斉藤氏がしている。それによると、ユリウス暦の七月十日の午後七時ごろ、木星（このときマイナス一・三等）は金星（マイナス三・七等）の北東〇・七度にあり、接近の度合は〇・三度の合であつた。『明月記』の六月二日の記事では「東南一寸（〇・一度）」とあるが、これは定家の誤認で、翌日天文官からの伝達を受けて訂正している。「兵飢ゆ」や「白衣の会（葬礼）」という表現から、凶兆として取り上げられていることがわかる。また、七月十二日の記事には白昼に星が見えたといふ記事があるが、

これは日没前に金星が見えたことを指す「太白昼見」であり、凶兆の天象とされている。

つぎに『太平記』の中の「三星台」についてみてみる。建武の中興が失敗して南北朝が始まったあと、貞和五年（一三四九）閏六月、足利直義は高師直と不和となり、京都市内に騷擾がはじまり、いったんはおさまったかに見えた南北朝の争乱もここに再燃を見た。

『太平記』ではそのきっかけが「三星台」によつて予兆されたといっている。『太平記』巻二七、「天下妖怪の事」の条にある六月十日（一三四九年六月二六日）の箇所である。

又同じく六月十日より太白、辰星、歳星斗、四季司宿曜、三星合ひ打続きしかば、月日を経ず大乱出来て、天子位を失い、大臣災を受け、子父を殺し、臣君を殺し、凡そ飢饉疫癘、兵革の禍なり。謹慎軽からずと陰陽宿曜等密奏す。⁽²³⁾

ここでの辰星とは水星のことを指している。この記事に対する検証と考察を齊藤国治氏が行っている。

このとき三星はふたご座にあり、金星は木星の西の一三度、水星は木星の南東六度にあり、暁の東天に相ついで昇つてきた。まだ互いになら離れていて、「三星合」などといえる状態ではなかった。三星は日を追つて互いに接近してユリウス暦の七月一二日には、——中略——かなり接近して三星台となった。『太

平記』の作者はそれを知つて天下大乱の兆と物語を盛り上げたのであろう。

戦乱のきっかけとして三星台という天文現象が描かれているから、人々にとつて凶兆として認識されていたであろうと考えられる。

この時代の人々にとつて日月や惑星の合犯という天文現象は驚きと恐怖を感じる身近な事件であつたといえるだろう。

三 北極星・北斗七星

北の空の中心に輝く北極星は北辰、子の星・一つ星など、多くの呼び名を持つ。北の空の中央に位置し、他の星座が一昼夜で一周するのに対して、ほとんど動かずにいる。日本にも早くから伝わつてきていた『論語』のなかの一節に「政をなすに徳を以てせば、譬えば北辰のその処に居て、衆星これを共むが如し」とある。⁽²⁵⁾常に北極を示す北極星は、その周りをほかの星々がめぐることから天体の中心として考えられ、古代の東西を問わず尊い星とされてきた。エジプトのギザのピラミッドには、北極星を王の部屋から観察するための穴があげられていることは有名である。天上来と地上世界とを同じような世界観でとらえたことから、天の中心である北極星が、地上における支配者たちの象徴とされたのは当然であろう。「北辰」

という呼び名は、平安時代の星祭で北辰妙見の名が広く知れわたったことによる。北斗七星は北極星の周りを回るおおくま座の一部である。北極星の周りをおおよそ一昼夜で一周するため見れば時間や方角を知ることができ、式盤としても用いられた。北極を指し示す重要な星として、北辰と混同されることもあった。

日本は中国から伝わってきた北辰北斗信仰を多分に享受したといえる。ゆえに、天の星の運行が地上の現象や事件に密接にかかわっているという思想も受け継いでおり、地上の為政者は星に無関心ではいられなくなつたわけだ。欽明天皇十五年に百濟より易博士と暦博士らが来朝し、推古天皇十年には觀勒が渡来したが、白鳳時代には、陰陽思想のもと星宿への関心が非常に高まつていった。しかしそれは単に占星術のためだけではなく、陰陽五行思想による世界観こそが中心の関心事項だつたとの指摘がなされていると林温⁽²⁶⁾氏は述べる。中国における皇帝が、天における北辰と地上における自らの地位とを類似的にとらえたのと同じ思想を、日本では天皇が有した。それは臣民たちにもその世界観を信じるように要求したことを意味している。

北辰北斗にはさまざまな信仰があるが、中でも注目すべき信仰として北辰信仰(妙見信仰)についてみてみたい。本来は北極星(＝北辰)への信仰だつたものであるが、北斗七星も一緒に信仰されて

いる様子がうかがえる。北極星と北斗七星が混同されていたのである。

実際にどのような信仰がもたれていたのかについて、『日本靈異記』の中から二つほど取り上げてみてみる。

絹の衣を盗ましめて、妙見菩薩に帰願しまつり、その絹の衣を修得せし縁 第三十四

紀伊国安部郡の私部寺の前に、昔、一つの家有りき。絹の衣十ひきを盗人に取られ、妙見菩薩に憑りて祈り願ひき。盗みし絹は木の市人に売りき。七日に満たず、倏に猛風来りて、厥の絹を纏へる鹿、衣を褒げて南を指して往き、主の家の庭に随きて衣を得しめ、乃ち天に去り賜ひき。買へる人転へ聞いて、乃ち盗みし衣なることを知り、当頭キテ求めず。寔喋して動かざりき。斯れも亦奇異しき事なり。⁽²⁷⁾

妙見菩薩は「妙(たえ)に見(あらわす)」という盗難あるいは紛失物を見出す神として信仰されていた。また、そこから転じて目につく神ともされていたようである。他にも次のような話もある。

網を用ゐて漁せし夫の、海中の難に値ひ、妙見菩薩を憑み願ひて、命を全くすること得し縁 第三十二

吳原忌寸名珠丸は、大和国高市郡波多の里の人なりき。幼きと

きより網を作り、魚を捕るを業としき。延暦の二年の甲子の秋の八月十九日の夜に、紀伊国海部郡の内の伊波多岐嶋と淡路国との間の海に到りて、網を下ろして魚を捕りき。漁人、三つの舟に乗りて九人有り。忽ちに大風吹きて、彼の三つの舟を破りて八人溺れ死ぬ。時に名妹丸、海に漂ひ、心を至して妙見菩薩に帰し、願を發して言さく、「我が命を濟ひ助けたまはば、我が身を量べて、妙見の像を作らむ」とまうす。海に漂ひ、波を拒み、力を疲らし、心を惑はし、寐るが如くにして覚むること無し。皎天に覺きて睽れば、身は彼の部内の蚊田の浦浜の草の上に在り。唯済はれて、己が身を量べ、像を作りて敬ひき。嗚呼異しきかな。風に遇ひて舟を破り、波に撃たれて人を亡ひ、単唯一のみ在り。身を怒リテ像を作る。定めて知る、妙見の大助にして、漂へる者の信力なること⁽²⁸⁾。

この話からは、妙見菩薩は航海の神をしても崇められていたことがわかる。
妙見菩薩、北辰を祭る際に御燈を献ずるならわしがあった。天皇は毎年三月三日に北山の雲巖寺で北辰に法燈を献じていた。これが「御燈」の行事である。民間でもこれを真似、星祭を行うようになった。しかし、次第に熱狂的になり、職を捨て業を忘れて僧俗、男女が入り乱れて風俗を乱すようになってしまい、弘仁二年と延喜十五

年の二回にわたり「北辰を祭るを禁ず⁽²⁹⁾」という勅令が出た。その結果、星祭りは絶え、朝廷の御燈行事も廃止された。その一方で、真言密教の寺々では星曼荼羅⁽³⁰⁾を本尊として北斗法⁽³¹⁾を修し、徐災・福德、延命を祈願していた。一度衰えた北辰信仰は、鎌倉時代に日蓮宗が興ると再び盛んになり、国々で競つて妙見堂が建てられた。特に信仰に熱心だったのは武士階級の人々であったようだ。その理由は妙見が北斗七菩薩を率いて武運を守ると言われていたためである。

北極星、北辰と北斗七星は、実に多様な形で祭られ信仰されてきた。そのため妙見信仰は、様々なところでその片鱗を見つけることができ、人々にとても深くなじまれていた信仰であるということがうかがえる。

四 流星・彗星

次に、流星について考察する。現代では、「流れ星が消えるまでに、三回願い事を唱えることができれば願い事がかなう」といわれているが、この言い伝えはいったいどこから始まったのか。この言い伝えはアルタイ系諸民族の天に対する世界観から来たものであると考えられると、勝俣隆氏はウノ・ハルヴァ『シヤマニズム アルタイ系諸民族の世界像』を紹介している。

アルタイ系諸民族の世界観では、天は、天幕を屋根状に大地を

覆うもの、あるいは大鍋を伏せたような半球状をした堅固な蓋として観念された。星は、その天幕や半球状の蓋に開いた穴であつて、そこから、天上界、神々の世界の光が差し込んでいると考えた。その考えにおいて流れ星は、天の神々が天の扉を少し開いて地上の様子を眺める時に流れる光として説明される。流れ星に願ひ事に願ひ事をすれば叶うというのは、流れ星が流れている時は天の神様が地上を眺めている時だから、直接に願ひ事を聞き入れてもらえるからだという。

流星は、和名ナガレボシ、ヨバイボシ、漢名は流星、飛星、奔星、天狗星、狂夫星、地鷹、天鷹、梁星など多くの名がある。『日本書紀』舒明天皇九年二月二十三日（六三七年三月二十四日）に、こんな流星の記事がある。

九年の春二月の丙辰の朔にして戊寅に、大星、東より西に流る。便ち音有りて雷に似れり。時人の曰く、「流星の音なり」といふ。亦曰く、「地雷なり」といふ。是に僧受僧の曰く、「流星に非ず。是天狗なり。其の吠ゆる声、雷に似れるのみ」といふ。³³

これは有音隕石のことであろうと斎藤氏は述べる。³⁴比較的大型の隕石が地表面に平行して飛行した場合には、この記事のように空気振動を起こして音響を発することがある。これも流星の一つである

とされていた。

流星や隕石は突然天から星が落ちてくるというのだから、人々が驚くのも無理はない。天は地上世界の写しであるという考えから、星が流れるというのは世界からの脱落であり死人が出るという考えもあった。凶変の前兆だと恐れられ、徐災のために大赦や、神仏への祈祷が行われていた。『枕草子』にも流星を恐れ忌み嫌う様子がうかがえる。

星はすばる。彥星。夕づつ。よばひ星すこしをかし。尾だになからましかば、まいて。³⁵

「よばひ星」は流星の和名である。凶兆である尾がある星、流星に対して「尾が無ければよいのに」といつているのは、夜空に輝く星々と流星に対する人々のとらえ方の違いがうかがえるだろう。

つぎに彗星について見てみる。彗星は和名ハキボシ、妖星といわれ、この星が現れると災害が起るとされてきた。彗星には三種の種類があり、彗星・孛星・長星に分類され長さや様子がそれぞれ異なる。³⁶大風、飢饉、疫病、旱魃、地震、災疾や天皇や皇族、高官の病や死の原因が彗星の出現である考えられ、長星が最凶であるとされていた。

『吾妻鏡』承元四年九月三十日には次のような彗星の影響が書かれている。

卅日乙卯。晴。戊尅。西方天市垣第三星傍見奇星。三尺余。芒
氣殊盛。長一許丈。此星如本文者。為彗星之由。有申之輩云々。

この彗星の出現について、世の中で騒ぎになった様子を金指正三
氏⁽³⁷⁾が次のように説明している。

『吾妻鏡』の承元四年（一一二〇）九月三十日の条に、午後八
時から西方に光芒長さ一丈ばかりの彗星の現れたことを記し、
十月十二日の条に、京都飛脚が到着し、去る三十日の彗星につ
き、京都においては彗星勘文が進められ、公家は内外の御祈を
おこなわれた上、改元のことがあるであろうと報じている。⁽³⁸⁾

これは彗星の出現が天皇退位の動機となったと言っている。彗星
は掃除をつかさどり、旧を除き新を布くことの象徴として出現する
のだという思想があったため、改元をするという事もしばしばあつ
たようだ。平安時代では彗星出現による改元は四回行われている。
惑星や恒星、流星・彗星による天の動きが、生活に深くかわる
農耕や時の支配者の交替まで実に幅広く影響していることがうか
がえる。また、吉事よりもやはり凶事への懸念や対処のために活躍
していたと考えられる。

おわりに

日月や星々が起こす天文現象に多くの関心が寄せられていた時

代、天文を読み解くことで物事の吉凶を占い、それが社会に大きな
影響を及ぼしていた。

日月食をはじめ、惑星の合犯、彗星など多くの天文異変の記録が
残っていることから、盛んに観察が行われていたといえるだろう。
湯浅吉美⁽³⁹⁾氏の調査によると『吾妻鏡』には七十箇所ほどの天文記事
を見受けることができるという。その数からも、人々が天に抱いた興
味と畏怖をうかがうことができるだろう。天文異変の中でも特に凶
兆とされていたのは、日食や太白昼見である。太陽が犯される日食
や太白昼見は、太陽神天照大神の子孫である天皇や上皇、院などに
危険がせまると考えられ、一大事とされた。天皇の守護である太陽
が隠されることに、人々は不安を感じずにはいられなかっただろう。
また月食では、当時の天文学の正確さを証明するという役割があつ
たと考えられる。満ち欠けによって人々に暦を教え、月食では天文
学の整合性を証明し、風流を愛する人々の歌に詠まれた月は、実に
人々に近い存在であったことだろう。

惑星や恒星、彗星など星々にもそれぞれ意味づけがされ、天文を
読み解く重要な役割を果たしていた。合犯による占いや星辰信仰か
らは、古代の宇宙観を見ることが出来る。『太平記』では、物語を
盛り上げるための装置として、三星合を戦いの予兆として描いてい
た。当時の人々が、天文異変をどのように感じていたかということ

を教えてください。いるだろう。

為政者たちは、天文を読み解くことで、人々の天への畏怖をうまく利用した。しかし、次第に天文を読み解くことは専門的な能力とされ、陰陽師が登場した。彼らが残した多くの天文記事や公家の日記、物語から、実に様々な読み解きがされ、それに合わせ、祭りや祈禱が行われた。光り輝く日月や星々をただ見あげるだけでなく、そこに意味を持たせ、自らの生活の理に組み込んでいた古代中世の人々は、天文の文化を持っていたといえるだろう。

- 注(1) 月が太陽と地球の間に来て太陽光線をさえぎる現象の事である。皆既日食、金環食、部分食などがある。(『広辞苑第五版』(一九九八年 岩波書店))
- (2) 小島憲之・直木考次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守『新編日本古典文学全集三 日本書紀 第二巻』(一九九六年 小学館)
- (3) 齊藤国治『星の古記録』(一九八二年 岩波書店)
- (4) 注(3) 前掲書
- (5) 注(3) 前掲書
- (6) 注(3) 前掲書
- (7) 『第十一巻 日本紀略後編・百鍊抄』(一九六四年 吉川弘文館)
- (8) 月食とは、月が地球の本影に入って月が暗くなる現象のことである。(内田正男『暦と時の事典』雄山閣出版一九八六年)
- (9) 渡邊敏夫『日本・朝鮮・中国 日食月食宝典』(一九七九年 雄

山閣出版)

- (10) 注(9) 前掲書
- (11) 『第十三巻 統史愚抄 前篇』(一九六六年 吉川弘文館)
- (12) 『第三十二巻 吾妻鏡 前篇』(一九六一年 吉川弘文館)
- (13) 中山茂『日本の天文学』(一九七二年 岩波新書)
- (14) 橋本敬造『中国の占星術』(一九九三年 東方選書)
- (15) 野尻抱影『日本星名事典』(一九七三年 東京堂出版)
- (16) 金指正三『星占い星祭り』(一九六八年 青蛙房)
- (17) 注(16) 前掲書
- (18) 注(15) 前掲書
- (19) 天体同士が異常接近をする場合に○・七度以内の接近なら「犯」といい、○・七度以上離れた接近なら「合」と呼んだ。時代が下ると○・七度にこだわらず、一般に両星が接近すると「犯」と書いているが、ここでは用いていない。(斎藤国治『国史国文に現れる星の記録の検証』(一九八六年 雄山閣出版))
- (20) 注(3) 前掲書
- (21) 藤原定家『明月記 第三』(一九七〇年 国書刊行会)
- (22) 注(3) 前掲書
- (23) 高橋貞一『新校 太平記 下』(一九七六年 思文閣)
- (24) 注(3) 前掲書
- (25) 注(16) 前掲書
- (26) 林温『日本の美術 第三七七号 妙見菩薩と星曼荼羅』(一九九七年 至文堂)
- (27) 『新編日本古典文学全集十 日本霊異記』(一九九五年 小学館)
- (28) 『新編日本古典文学全集十 日本霊異記』(一九九五年 小学館)
- (29) 野尻抱影『日本星名事典』(一九七三年 東京堂出版)『日本記略

前編十三」の延暦十五年に「庚戌。令諸国学武芸秀衆者。勅禁祭北辰。」とあり。

- (30) 星曼荼羅とは、北斗法による星供に用いる曼荼羅で、中央に北斗七星、その外側に十二宮、更にその外側に二十八宿を配し、いずれも絵図化したものであり、仏教宇宙観を表現したものである。天台は円曼荼羅、東寺は方曼荼羅を用いた。(金指正三『星占い星祭り』(一九六八年 青蛙房))
- (31) 北斗法は、北斗供ともいう。一字頂輪王を本尊とし、延命または徐災のために北斗七星を供養する修法である。(金指正三『星占い星祭り』(一九六八年 青蛙房))
- (32) 勝俣隆『星座で読み解く日本神話』(二〇〇〇年 大修館書店)
- (33) 『新編日本古典文学全集四 日本書紀③』(一九九八年 小学館)
- (34) 注(3) 前掲書
- (35) 松尾聰・永井和子『新編日本古典文学全集十八 枕草子』(一九九七年 小学館)
- (36) 注(16) 前掲書
- (37) 注(16) 前掲書
- (38) 注(16) 前掲書
- (39) 「坂東武者は惑星の変を怖れたか―『吾妻鏡』に見える惑星記事の検証―」(湯浅古美『埼玉学園大学紀要(人間学部篇) 第4号』二〇〇四年二月)

(二〇一〇年 卒業)